

昇一は履歴書に自分の名前を書き込むのにあきあきしていた。幼いころから自分の名前の由来を父親から聞かされていた。

「一番高いところへ昇るように」

履歴書に「新田 昇一」と書きながら、昇一は自嘲のつぶやきを吐いた。

「何が一番だよ」

同年の大学四年生が一人いるとしたら、九千九百九十九番目くらいじゃね？と昇一は思った。一人目だと思わなかったのは、今の自分よりも下にいる誰かを仮定しておかないと、持ちこたえられそうになかったからだだった。

子供のころは、父親がにこにこしながら「一番高いところへ昇るように、だぞ」と言うては昇一を抱きあげていた。中学にあがるころまでは、昇一の成績表を見る父親の表情はいつも緩んでいた。父親は、昇一が県で一番の公立高校に入るものと決めてかかっていた。三年になって思うように成績がとれなくなると、父親は評判の進学塾に昇一を通わせた。昇一が塾内テストの結果でトップクラスから落とされると、父親は塾へたびたび問い合わせの電話をした。ついに昇一が目当ての公立高校には入れないと解ると、父親は名門とうたわれた私立の進学コースへ行けと命じた。

高校生になった昇一に、父親ははじめこそ「東大、東大」とうるさく吹き込んだが、しだいにその顔にはあきらめの表情が始め、しまいには昇一の進路に対して関心を失ったようだった。東京の私大が進路として決まった時、母親は強い反対も効果がなかったことに悲しそうな眼をした。父親とはあまり話もしなかった。

書きかけの履歴書を放り出したままパソコンの画面に出ているマージャンゲームに興じていると、昇一の携帯が震えて受信を知らせた。母親からだった。メールの打ち方を覚えようとしないうちに電話をかけるが、昇一はめったに出なかった。就職の話題が出るのがいやだからだった。

大学に入って初めのころは、教職課程をとった。しかし教師になろうという意欲があるわけではなく、二年目以降は履修をやめてしまった。公務員試験に向けての勉強をはじめ

るまわりの学生を尻目に、「テキトーな会社にはいるさ」と、昇一はバイトとイベントサークルにあけくれた。

雑踏の中で人々の流れに従って歩くかのように、昇一はリクルートスーツに身を包んで就職活動を始めた。周りが面接マニュアルを持っていけば昇一もそこに書いてある文句を面接官の前で暗誦し、誰かが「個性を出すのがいい」と言えばマニュアルを忘れて答えてみた。夏に行ったオーストラリアでのホームステイやタイ旅行を海外経験と言って語ってみたり、サークルでは人をまとめる力を身につけたと言ってみたりした。始めのうちは「ここが自分の会社になるのかも」と思ったりしていた。しかし次第に、誰に対するのかわからない義務感だけで書類を送り、運良く連絡が来れば面接に赴き、重ねるその回数を数えては鬱屈した気持ちに沈んでいくだけになった。

能力や人格じゃないんだ。不景気だから、どのみち採用なんて限られてるんだ。運だよ。運がないだけさ。たまたま先に生まれたってだけで上から見下すような眼で俺を見やがって。不景気な時だから、大人はみんな自分の地位を守ることだけに忙しくて、そのせいで俺みたいな若者には仕事がないんだ。

周囲の友達の間で内定をもらえないのが自分だけになると、昇一は人に会うのが嫌になってきた。ネットで情報を見たり応募をするだけで、「就職活動」をしたさ、と自分に言い訳しては部屋に引きこもっていた。

母親は地元に戻って就職することを願っているのに違いなかった。このまま内定がもらえなくても、実家に帰るしかないのかな。一年留年させてくれとは、昇一も言いづらかった。大学三年の秋、父親が肝臓ガンで死んでいたからだった。

…もうすぐ、大学の卒業式か。出たくない。出られない。自分が出なければすむということじゃない。周りの奴らの笑顔を見たくない、卒業だ新生活だ社会人だと喜ぶ奴らのことなど考えたくない、奴らが俺のことを「そりゃいばどうしたんだろう」なんて思い出すことも、あつてほしくない。

死のうかな。昇一はそう思った。たいした理由もなく生きていたんだから、たいした理由もなく死んだっていい。

なにか、大きな衝撃に襲われたような気がした。体が強く揺さぶられたような気がした。すぐ息が苦しかった。強い光に眼を突きさされて何も見えないような感覚があった。

高く宙に浮いているのかな、と昇一は思った。あたりには煙がただよっていた。一面が白かった。上や下、右や左をぐるぐると見まわしてみた。

下を見たときだけ、白ではない何か別の色が見えた。青だった。

それは海だった。

ああ、俺死んだのかな。今から天に昇っていくわけ？一番高いところに？なんていう皮肉。

しかし昇一は、自分の体が下へ落ちていく感覚を覚えた。それと同時に、なにか大きな鉤爪のようなもので背後から両肩を強く掴まれたのを感じた。

「それ」は急激な速さで下へと突き進んでいった。下方の海がどんどん近付いてくる。

昇一は自分を捕らえて急降下している「それ」を、わずかに首を横にひねって視界の端に捉えた。「それ」は昇一を獲物の鼠のように掴んで飛んでいる、漆黒の大きな鳥だった。

「あああああ…」

昇一は驚きと恐怖の混じった声を出した。

「ばかみたいな声を出すな」

その鳥が言った。

「死ぬくらいの度胸があるなら、わたしの姿くらいでおどろくな」

俺やつぱり死んだのかな。これはどう見ても天使には見えないな。俺地獄行きなのかな。

俺、やつぱり自殺したのかな。なんだか、よく覚えていないや。

黒い翼がバサリと音を立てて広がり、下降の速度が緩んだ。昇一は海を見下ろしながらなにか違和感を覚えた。海だけど、なにかおかしい。海だけど、海じゃない。

波が固まっていた。海面が、樹脂を固めて作った模型のように固まっていた。鳥はさらに海面に沿って水平に飛び、岸の方へ向かった。

そこには港町があった。ホテルやレストランの看板、オレンジのランプが灯る市場、海沿いの道路には保冷車が目立った。せり上がる斜面にひしめく家屋。

人の姿は一様に、海を背にして駆けている途中のようだった。その姿も、情景模型の中に置かれた人形のように、固まっていた。家々の間を縫うような道路には車の列があった。それぞれの車の中には人が詰まっていた。

だが昇一の眼には、海沿いの堤防が異様に映った。正確に言えば、「堤防」は見えなかった。丸く膨れ上がり、ぶあつい布団のように堤防の上に覆いかぶさっている波が、やはりそれ以上落ちて道路の上に崩れることなく、固まっているように見えた。

「時間が止まってる…」

昇一が呟くと、鳥は答えた。

「止まってはいない。わたしたちがへ魂の時間へ」のなかにいるだけだ」

「へ魂の時間へ」って…」

やっぱり俺は、死んだのかな。魂になって、この悪魔に地獄に連れて行かれるのかな。

「へ魂の時間へ」において一億二千万秒たつと、おまえが知っている時間で一秒たったことになる。おまえの目に捉えられないくらい、ゆっくりと時間は流れている」

「これ、なんなの…」

昇一がそう問うと、鳥はふたたび急上昇して、海岸線が地理の時間に見た地図のように見えるまで飛んだ。

鳥は言った。

「今おまえが見たようなことが、何百キロにわたる海岸線で今起きているのだ。おまえの知っている時間で十分前、現代人が知っているかぎりで最大規模の地震が、この真下の海で起きた。そして起きた大津波は、一番近い海岸までは、たった十分で到達した。おまえが見たのは、その到達の瞬間だ」

「なんで…」

昇一は言葉を失った。

「なぜそんなことが起きたのか、という意味での問いなら、それは誰にも答えられない。なぜわたしがおまえにへ魂の時間へ」でその光景を見せたのかという問いならば、答えてやろう」

鳥は一度昇一を宙へ放り出すと、今度は前から昇一の両腕を掴み、正対した。大きく開

いた漆黒の嘴と、ギラギラ光る漆黒の瞳が、恐ろしかった。その姿は巨大な鴉だった。

「わたしの名はレイヴン。余命配分をするのがわたしの仕事だ」

「ヨメイハイブン？」

「おまえのように、予定外に命を投げ出すものがでると、あの世とこの世の魂の調律が狂う。だから、おまえが投げ出して余った分の命を、他の誰かに配分するのだ。今からその誰かを、おまえに選び出してもらう」

「俺に？」

「おまえの責任だからな。さあ、時間は無限じゃない。おまえが命を投げ出したのと同じ日に命の終わりを迎える者たちの中から、余命を与えるものを選ぶのだ。だからわたしはおまえにあの光景を見せた。それから言うておくが、わたしは死神でも悪魔でもないからな」

荒町健三は青森は八戸の港町で生まれた。父親は戦争から帰ってこなかった。家は貧しかった。健三は小学生のころから、上の二人の兄のように新聞配達をして家計を助けた。上の兄二人は中学を出ると漁船や貨物船の船乗りになった。兄二人と母親がしきりに勧めるので、健三は高校に行くことにした。工業高校だった。兄たちや母親に世話になっていることを思い、健三は必死に勉強した。おかげで、高校を卒業すると大手建設会社の仙台支店に入社することができた。健三は、北海道、山形、秋田と、様々な建設現場で仕事をした。二十五歳のとき、会社の先輩の紹介で見合いをし、結婚をした。数年単位で様々な場所に移り現場で仕事をする健三にしっかりとついてきて支えてくれる女性だった。最初に恵まれた子供は男の子だった。それから一家は仙台の社宅に居を構えたが、健三は相変わらずあちこちの現場を飛び回る仕事で、週末くらいしか帰れなかった。

健三は三人の子供に恵まれた。みな男の子だった。自分が兄たちのおかげで学校に行けたことを感謝してもしきれなかった健三は、自分の子供たちをどうしても大学に行かせたかった。そして三人とも大学に進学させた。仙台に建てた家は、三人の子供のうち二人が出て行くと広く感じて仕方なかった。

健三の兄弟のうち、長兄は三十代半ばで、次兄は四十代後半で、ともに病死した。健三は遺された兄たちの家族にもよく気を配った。息子二人の死をみとらねばならなかった母親のことを思うと、遠く離れて住んでいることが齒がゆくもあった。その母親が八十九歳で亡くなった時、健三は葬儀の仕切りで忙殺された。参列者のうちで一番多かったのは、

健三の会社の関係者だった。母親を送る一連の行事が終わって静かになった時、健三はとうとう一人になってしまった、とふと思った。だがすぐにそれは間違いだと気付いた。健三の傍らには、妻と三人の息子がいた。

やがて健三は定年退職を迎えた。だがまだまだ仕事をする気でいた健三は、知人の紹介で地元の建設会社に再就職した。妻は「仕事をしなくても充分やっていける」と再就職に反対だったが、それを押し切り、港湾再開発工事の現場での仕事にかかった。

健三は仙台の家を離れ、現場に近い港町に宿舍を借りていた。週末になると妻が宿舍の掃除をしにやってきた。そこで二人ゆっくり過ごす時間が健三の密かな楽しみだった。

ある金曜の午後も、護岸の堤防に立ちながら健三は頭の中に凶面を広げていた。健三は港の風景が好きだった。生まれ故郷を思い出すのだった。だから再就職先を選ぶとき、港湾工事の仕事が決まっていたこの会社を選んだのだった。

レイヴンの爪に掴まれた昇一は、最初に見せられたのと違う別の港町にやってきた。港から高台に伸びる道路には乗り捨てられた車がひしめいていた。

港に、作業服とヘルメット姿の男が一人いた。男は、おなじく作業服・ヘルメット姿の人間の、最後尾にいた。避難指示の陣頭指揮にあたっていたようであった。

「彼が、その荒町健三だ」

レイヴンは昇一にそう伝え、そしてこう付け加えた。

「ここには、あと十二分で大津波がやってくる。彼も、その津波にのまれる」

昇一は、無言のまま健三の姿を見つめていた。このあたりの三月はまだ冷える。海辺ならばいつそう風も冷たいはずだった。しかし健三の目尻や頬には汗の滴がいくつもついていた。向こうの時間の中では、滝のように流れているはずだった。

「たとえば、この者だ。どうする。おまえの余命を彼に渡すか？」

昇一はなお無言のままだった。しばらく逡巡して、ようやく一言つぶやいた。

「わからない…」

「では、他の者のところへ行く。決めるのは、あとでもかまわない」

杉原里美は、自分の生まれた時の話を聞くのがあまり好きではなかった。超未熟児で生まれ、心臓に重い先天的欠陥のあった里美は二歳になるまで病院のベッドで過ごした。里美の命をつなぐ装置をそなえたベッドで自宅にはじめて入った時のことは里美も覚えてい

なかった。

里美の記憶は病院のベッドの上から始まっていた。それはアメリカの病院だった。

里美が三歳と二カ月になったとき、心臓の症状悪化が深刻になり、助かるには心臓移植手術しかなかった。むろんそれは日本では不可能だった。里美の両親は知人のすすめで支援団体の協力をうけ、「さとみちゃん基金」を立ち上げ善意の募金を募った。県内のテレビニュースなどにも取り上げられ、目標の一億円を九カ月で達成した。それから里美は母親とともに渡米し、条件の合致する心臓の提供者が現れるのを待った。

里美の記憶は、そうして過ぎたアメリカの病院のベッドから始まっていた。長い休暇が取れた父親が日本からやってきて、母と共に自分のベッドの横にいた。背の高く眉の濃い医者と、青い眼の看護師がその背後にいた。

その記憶を証明する写真が、里美の家にはいくつかあった。小さな子供を囲む父、母、そしてアメリカの医者と看護師。

移植手術を終えて日本に戻るまで三年かかった。里美は新しい転入生として小学校の二年になった。すでに里美はある種の有名人だった。同級生からはしばしば「ボキン、ボキン」とか「イチオクエン」とはやされ、からかわれた。両親にそのことを話すと、「気にはいけない」と言い聞かされた。

あなたが元気でいられるのは、とってもおおくの人たちが助けてくれたから。心臓が弱く生まれてしまったあなたを、病院の先生や看護婦さんたちが一生懸命助けてくれた。しゅじゅつをしなくちゃいけなくなった時、とってもお金がかかるとわかっておとうさんもおかさんも困ってしまったけど、日本中の人たちが少しずつ助けてくれて、アメリカへ行っにしゅじゅつすることができた。そして、あなたに心臓をくれただれか。そのおかげで、あなたは元気になった。そういうたくさんの人が、あなたの味方についている。だから、クラスの子にちよつとなにか言われたって、気にしなくてもいい。あなたの味方の方が、ずっと強いんだから。

でも、そんな味方って、誰？どこの誰かはわかんないじゃん。あたしがからかわれてるとき、言い返してくれないもん。

子供だった里美はそんなふうに思っていた。

結婚する時、里美は子供のころの手術のことを気にした。高校からの顔なじみで、短大を出て市役所に勤めている時に結婚を申し込まれたが、その時始めて里美は手術のことを話した。その相手、杉原壮一は「すごいじゃん」と感心するくらいで、特段気にもしなかった。里美の両親が壮一に手術の昔話を自慢げにするのが、かえって里美にはばつが悪い気がしていた。

子供が出来たとわかった時、里美はいよいよ自分の心臓が気になった。かかりつけの産婦人科医は「心臓には問題ない」と確約してくれた。しかし、もしおなかの中の子供が自分と同じような心臓をもつて生まれてきたら、と考えずにはいられなかった。

だから、検査でおなかのなかの子供の心臓に異常がないとわかった時、里美はようやく安心できた。

昇一は、レイヴンに掴まれながら海沿いの松林の上を飛んで過ぎ、田園風景の中にたたずむ小さな産婦人科医の建物の窓際に寄った。

「これが、杉原里美。その横に寝ているのが、生後二日目の子供、名前は三月生まれと
いうことから〈やよい〉、性別は女」

レイヴンは昇一に窓の中を見るよう促して、そう言った。窓の中では、部屋の入口から二人の看護師があわてて駆けこんでいる様子だった。

「この親子を急いで避難させようとしている」

「今度は、このおかあさん…?」

「ちがう。子供だ。親子とも津波に吞まれるが、母親は死さない」

昇一は無言のまま、産着に包まれた杉原やよいを見つめていた。

「たとえば、この子だ。どうする。おまえの余命を、この子に渡すか」

「…わからないよ…」

昇一は力なくつぶやくことしかできなかった。

「では、他の者のところへ行く。決めるのは、あとでもかまわない」

斎藤房江は四人の兄弟姉妹の長女として生まれた。すぐ下の弟とは四つ、一番下の二女とは十二歳離れていた。戦争経験のある父親は房江が十九の時胃がんで死に、それからは母親と共に弟妹たちを支えた。保険事務所で働いて、弟の就職のために自動車学校へ行く

資金を出してやったり、妹たちの学費を世話してやったりした。二人の弟は高校を出ると働き始め、二女は栄養士になった。房江は二十五歳で、知人の世話でお見合いした上田昭彦と結婚した。不動産会社に勤める昭彦のすすめで房江は仕事を辞めて家庭に入った。一男一女に恵まれた。

二女の明子は二十七で結婚、二十九のとき初めて子供が出来た。結婚相手の敏夫は酒とパチンコ好きで、明子の収入に頼ってばかりの、仕事の長続きしない男だった。

妊娠六か月の時、明子は腹痛を訴え、そのまま入院した。すい臓ガンがあることがわかった。明子は男の子を出産してから六か月後に亡くなった。生まれた子を敏夫に任せられないと思つた房江は、明子が「清太」と名付けたその子をあずかった。清太が二才になる頃、房江は清太を養子にした。昭彦がそうしようと言ってくれたことが、房江はうれしかった。昭彦は敏夫に仕事を世話したり清志に会いに来るよう連絡したりしたが、敏夫はそのうち寄り付かなくなつていった。

清太は、房江の子供たち、隆司と紀美子との三人兄弟のように育つた。

房江は、生みの親のことをいつ話そうかと迷っていた。高校入学時に戸籍の書類の提出が必要になった時は「お母さんが取ってきておくから」と言い、封をした封筒に入れてそのまま出すように言つた。

清太が成人式を迎えた頃、敏夫の実家から連絡があつた。敏夫が肝臓ガンでもう長くないということだった。房江は昭彦と話し合い、清志に全て話した上で、敏夫の見舞いに一緒に行つた。それから三か月後、敏夫は亡くなった。

清太が意外なほど冷静に全てを受け入れ、特段大きな反応を見せなかったことに、房江はすこし驚いた。ひよつとしたらうすうす何かに気づいていたのかしら、と思つたりした。

清太は高校を出た後調理師学校に入り、地元のホテルに就職した。

兄の隆司、姉の紀美子から実家の立て直しの話を聞いた時、清太は「資金の一部を出し合おう」という兄の提案を快く受け入れた。

昇一はレイヴンの爪につかまれながら、海から遠く離れた住宅地まで飛んできた。立ち並ぶ家々のなかには、屋根から瓦が落ちかけている様がそこそこに見られた。

レイヴンはその家並みの中、白木で組まれた建築途中の家のところへ昇一を連れて行つた。そこではまさに、組まれた材木が崩れて倒れ積み重なつてしまつていた。

積み重なつた柱の下から、すこし皺のある細い手が見えていた。

「これが、上田房江。家の建て替え現場を訪ねて、職人たちに茶を振る舞っていたところで、地震が起こった。津波はここまで来ないが、建材の下敷きになって命を失う」

昇一は無言のまま、柱の山をみつめていた。

「たとえば、この者だ。どうする。おまえの余命を、彼女に渡すか？」

「わからないって…」

昇一はまたしても、力なくつぶやくしかなかった。

「おまえはおなじことしか言わない。おまえの魂には力がない」

レイヴンは冷たい声でそう言った。なんだか、誰かから言われたことのある言葉であるような気が昇一にはした。

「おまえのような弱き魂の者には、言っておいてやろう。おまえはこれからさらに一万四千三百九十七人の人間のもとへ赴くのだ。もし、余命を渡す一人の者をおまえが決められないのなら、十人、百人、千人を選べと言ってもできないだろう。それならば、一万四千四百人の全てにおまえの余命を渡すことを選択するがいい」

昇一は驚いた。

そんなことができるのか。命を渡すことは、そのぶんこの人たちの寿命が延びるっということだろう。つまり、この人たちは助かる。大地震と、大津波で死ぬはずだった人たちを、一万何千人も助けることができるのか。なんだか、ちよつとしたヒーローみたいだ。よく覚えていないけど、自殺したのも、悪くないじゃないか。どうせ、なんのために生きているのか解らない人生だったんだし。

「じゃあ、そうしようかなあ」

昇一はなんだかい気分になって、そう答えた。

それから昇一はレイヴンの翼によって様々な場所に連れて行かれた。地震で崩れた道路。基礎から外れて傾いた家。倒れて家や車を潰してしまった電柱や信号機。それらの街々をいままさに襲おうとしている大津波は、縄を解かれるのをじっと待っている猛獣のようだった。

次元の違うへ魂の時間への中をまわるなかで感覚がおかしくなっていました。昇一は何日分、何週分の時間をレイヴンと共に飛び回ったかわからなかった。そのなかで巡りあった、へ魂の時間への中の人々のうちには、他の誰かと同じ人生を送ってきた人は

一人としていなかった。それが昇一には不思議だった。友人でも知人でもない、見知らぬ人の人生など考えたこともなかった。知ってる人と、そうでない人、それくらいの区別しか知らなかった。自分自身のことさえ、いまだきの、ぱつとしない大学生の一人という意識しかなかった。一人の人間のうちに、そんなにも多くの体験が、記憶が、感情が、時間が詰まっているのかと思うと、頭がくらくらする思いだった。それを一万四千四百人ぶん見つけていくことを、昇一は次第に、自分に対する罰であるように感じた。

簡単に自分の命を捨てたことへの罰。

ある寝たきり老人は、かつて幾人もの人々の命を救った名医だった。

波にのまれる漁船の上の男は、東京の商社を辞めて故郷に帰り漁師になった。

ジャージ姿の若者に抱かれた子供は、幾度もの不妊治療の末ようやく授かった子だった。

小学校の校庭でサッカーをしていた男の子は、重い喘息を克服しようと努力していた。

小学生のころ苛めに悩んだことのある十七の女の子は、昨日人生で初めて告白された。

子供たちと共に避難所へ駆けていた女性教諭には、離婚後離れて暮らす子供がいた。

孫の手を引く六十五の女性は、週に一度町の図書館で絵本の読み聞かせをしていた。

ある寝たきりの老婆はかつて、結婚相手を式の三日後に戦争へ送りだした。

映画なんかで救助の場面があると、かならず女性と子供が優先だ。それがやはり正しいのだろうか、と昇一は考えた。しかしまた、年老いた人々がいままで過ごしてきた時間と、生まれたばかりの子供がこれから過ごしていく時間とは価値が違うのか同じなのか、昇一にはわからなかった。

多くの人の人生を見れば見るほど、昇一には誰か一人を選ぶことが出来なくなった。やはり、黒き大鴉レイヴンの言うように、全員に余命を渡せばいい。俺は、みんなの命を救うんだ。

レイヴンは昇一を掴んだまま、大津波に襲われる瞬間が限りなく引きのばされた地上を去り、高く高く飛んだ。

レイヴンは昇一に問うた。

「おまえは一万四千四百人の者たちの魂を訪れた。さあ、決めるがいい。一人の者を選ぶか。あるいは、選ぶことができないか」

「決まったよ。全員だ」

「それでいいか」

「いいよ」

「わかった。ではわたしはそれで余命の配分を行なう。おまえは黄泉の境を越えることになる」

「…いいよ。大勢の命を救えたんだ」

この言葉を聞いたレイヴンは、次のように言った。

「命を救うのではない。余命が配分されるのだ」

「だから、みんなの命が延びるんだろ」

「おまえの余命の分けられたぶんだけ、延びる。…一人あたり、十二分」

昇一は絶句した。

「十二分だけ？そんな…」

「一人あたり、十二分」

「なんでだよ。それだけじゃ意味ないじゃんか！」

「だまれ。それがおまえの遺した余命の価値。おまえの人生における時間の価値にしたがい、一万四千四百人にわけた。おまえは、全員がこの先何十年も生きると考えたのか？おまえの魂にそのような価値があると考えたのか。思い上がるな」

「なんのためにたった十二分ぼち延ばすなんてこと…」

「それがわたしの仕事であり、この世界をうごかす仕組みだ」

健三は泥と瓦礫のなかで気がついた。胸の上に右手があつた。全身で、動かせるのはそれだけだった。その右手で、首から下げていた携帯を握った。流れずに首にあつてよかった。こんなふうにぶらさげるのはなんだかはずかしいんだが、あいつが「あなたはいつも携帯置き忘れるから」って、ネックストラップをよこすもんだから。

携帯を開いた。電源は無事だった。たいしたもんだ。防水を買っていてよかったな。履歴から通話を試みたが、無理だった。

不思議に、なんだかわかる。もうそろそろだめらしい。せめてメールでも。

「ごめん　いうとおりたいしよくしてゆつくりすればよかったね　ふたりで　ごめん」

送信を試みると、成功した。たいしたもんだ。ああ、よかった。どうやら、もうだめらしい。ああ、最期に、メール打つ時間があって、よかったなあ。

里美は泥と瓦礫の流れ込んだ車の中で気がついた。着せてもらっていたはずの上着はどこかに流れてしまっていた。

何があったのかよく覚えていなかった。しかし気がつくと、腕の中にはやよいがいた。まだ生えそろわない髪が濡れてはりついてる。だめ。顔色が真っ青。唇まで、まっしろ。だめ。里美の右手だけがかるうじて少し動いた。ゆびが、ふるえる。薄手の室内着を通して、泥の冷たさが全身にしみる。もうだめ、なのかな。

そのときやよいのくちびるがほんのすこし、ぱくぱくと動いた。里美は無意識に、ふるえる右手で右の乳房を出した。右手を必死に動かして、乳房についた泥を何とかぬぐってみた。体をなんとかひねって、やよいの口に乳首があたるようにした。弱々しいけど、確かに吸ってる。これで、おかあさんになれたかな。今日の朝も、なんとか、初乳をあげようためしてみて、だめだったのに。でも、今は、でないみたい。ごめんね。やよいは、最期に、がんばってくれたのにね。

やよいのくちが、だんだん動かなくなってく。これで、さよならなの？ごめんね。さよなら。

仕事休みだった清太は、揺れが収まった後電話やメールで両親に連絡を試みた。通じなかった。アパートを飛び出した。スクーターにまたがった。家の建て替え中に両親が借りているアパートへ向かった。道路に倒れた塀。事故を起こしたまま乗り捨てられた車。いつもより時間がかかった。そこには父親も母親もいなかった。

清太は建て替え中の実家に急いだ。そこにも両親はいなかった。

「あ、清太くん…」と、家の片付け中に声をかけてくれた隣家のおばさんの話で、清太は病院へ向かった。アパートを出るとき既にギリギリだったガソリンが途中で切れた。スクーターを乗り捨てて清太は走った。

病室には、ベッド脇に寄り添う昭彦がいた。

「おい、清太来た！清太来た！ほら、ほら…」

そう声をかける昭彦の横に立って、清太は房江の手を握った。房江は眼も開けなかったが、清太の手を握り返した。

「ごめん…ごめん…育ててくれてありがとうって…ちゃんと言わなくて…ごめん…ごめん…」

清太が病院について六分後、房江はこと切れた。その最期の瞬間まで、清太の手を握り返す力があつた。

「清太来るのを、待ったのよな、いかつたな、間にあって…」

昭彦は房江の上に泣き崩れる清太の背をさすりながら言った。

レイヴンは昇一を掴んでいた爪を離し、昇一を放り投げた。昇一はまっさかさまに落ちていった。そして、いつまでも落ち続けているうちに、なにか、落ちているのか昇っているのかわからなくなった。

どれくらいそうして宙を漂っていたかわからなくなっていたとき、昇一はふたたびレイヴンの爪に捕らえられた。昇一は朦朧としていた。

「レイヴン…」

「不規則な事態が発生した。このように一度に多くの死が発生するときには、このようなことが起こる」

「なに…」

「世界の歪みがきっかけで、生きている魂が一つわたしのもとに迷い込んできた。おまえのように自ら命を捨てたのではないが、予定外に余命を遺してわたしのもとに来てしまった。その者の余命配分を行なった。彼女はその配分先におまえを選んだ。だからおまえを元の肉体と時間へもどす」

「なんで…」

「なぜその者がおまえを選んだかという意味での問いなら、それは誰にも答えられない。なぜおまえをもどすのかという意味での問いなら、それがわたしの仕事だから」

昇一は自分の部屋で目覚めた。部屋の中がすこし乱れていた。本棚の本が落ちたり、パソコンのモニターが倒れたりしていた。

夢だったんだ。

昇一は床の上にあおむけに横たわっていた。視界のなかには、天井の合板の模様と、ハンガーラックのパイプがあった。そのパイプには、金具の壊れたベルトがかかっていた。

そうか。こんな方法で、俺、自殺しようとしたんだっけ。なんだか、ばかみたいだ。自殺ごっこでもしようとしたんじゃないのか。

しばらくそのまま呆然としていた昇一は、ハッと気づいてテレビをつけた。夢だったんだろうと思っていたことの一部は、夢ではなかった。画面の中では、夢の中で見た大津波のその後に起きたことが映されていた。

昇一は、体を強張らせてテレビに見入り続けていた。

どれだけそうしていたことか。着信音が昇一を我にかえらせた。

「もしもし、新田昇一さん？えー、こちら、宮城県警の、〇〇というものなんですが」

「はい…新田です…」

「えー、ちょっとね、気をしっかり持って聞いていただきたいんだけど、こちらの方ではね、ご存じだと思っただけど、たいへんなことがあって。運よく電話が通じたもんで、そちらにお知らせできてよかった。お母様、ね、ご自宅に居られたとき地震にあわれたと見られるんですが、家屋そのものはね、しっかりしてて、中の物が散乱しておるくらいという状態、なんです。お母様の方ね、おうちのなかで亡くなっているのが発見されてですね。負傷の跡なんかはちよつと確認できないようですので、何か発作のようなことだとは思っただけど、非常にお気の毒なこと、なんです。で、御親戚の方かな、みえられることになるようなんだけど、昇一さん、まあ今交通の方もなかなかね、むずかしいんですけど、できれば至急こちらへね、お帰りになったほうが、ね…」

昇一はしばらく呆然としていた。再び携帯を開き、履歴を見た。地震の起きたとされる時刻の三分後の、母親からの着信が記録されていた。